

デカルトにおける物体の存在について

久保田 進一

はじめに

デカルトは『省察』の「第六省察」において、物体の存在証明をしている。これによって、デカルトが主張する二元論の完成となる。すなわち、精神と身体（物体）は実在的区別がなされるということである。ただし、このことが言えるためには、いろいろな手続きが必要である。一つには神の保証が言えなければならない。そうでなければ、「第一省察」以来の懐疑によって、物体の存在は不確実な疑わしいものになってしまう。

そもそも、デカルトは「第二省察」の副題で「精神は身体よりもよりよく知られること」と述べており、逆に言えば、精神の存在は容易に知ることができるが、身体（物体）の存在を知ることはそれほど簡単ではないということである。その身体（物体）の存在をどのようにして、われわれに知られる存在にしているのであろうか。そのことが理解されなければ、デカルトの二元論は完成しない。

われわれは物体の存在は、知覚として認識し、その知覚の認識のもとに物体とはいかなるものかということから、物体の本質を規定していくのであろうが、デカルトの物体の存在認識は、そのようなあり方とは逆である。なぜなら、目の前にある物体はもしかしたら、存在しないかもしれないという懐疑の中にとどまっているからである。そのため、物体の本質規定をしてから、物体の存在に取りかかっているのである。

また、デカルトは「第五省察」の副題では「物質的事物の本質について、そして再び神について、神が存在すること」、あるいは「第六省察」の副題では「物質的事物の存在について、そして精神と身体との実在的区別について」とあるように、物体的事物 (*res corporalis*, *res corporea*) ではなく、物質的事物 (*res materialis*) を使っている。その理由の一つには、物質的事物と物体的事物は同義だからとも言えるかもしれない。しかし、それならどちらかに統一してもよさそうではないかとも思える。しかし、デカルトはあえて、「第五省察」・「第六省察」の副題に物質的事物 (*res materialis*) を

使っているのである。ここに、物質的事物と物体的事物について、どう捉えたらいいのかを考察する価値がある。

これらを検討する前に、予備考察として「第二省察」の蜜蠟の比喩が何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。そこで、本稿においては、「第二省察」における蜜蠟の比喩が、どのような議論をしているのかを確認した後で、「第五省察」の物質的事物の本質、「第六省察」の物質的事物の存在について取り上げ、物体の存在がどのように証明されたのかを検討していこうと思う。それによって、デカルトが実体として認めた物体（身体・物質）がどのようなものであるのかが明らかにされるだろう。

1 「第二省察」における蜜蠟の分析

デカルトは「第二省察」において、自己の存在を確立した後に、「私とは何か」という探求を行い、「私」とは精神であり、考えるものであるという結論に至る。ここでの議論は次のように言っている。

「考えることはどうか？ここに私は発見する。思考がそれであると。これのみは私から切り離されることはできない。私は在る、私は存在する。これは確かである。ではどれだけの間か？すなわち私が考える間である。というのも、もし私がすべての思考をやめるなら、その瞬間に私が在ることをまったく停止する、ということがおそらくありえるからである。いまや私は必然的に真であるものしか認めない。それゆえ限定して言えば、私とはただ考えるもの *res cogitans* でしかない。言いかえれば精神、すなわち魂、すなわち知性、すなわち理性である。これらの言葉の意味は、以前には私には知られていなかった。しかし、私は真なるものであり、真に存在するものである。しかし、それはどういうものであるか？私は言った、考えるものであると」⁽¹⁾

ここで、考えることだけが「私」から切り離すことができないということから、「私」とは考えるもの (*res cogitans*) ということと言える。つまり、考えるという属性を持った実体ということになる。それは、精神であり、魂であり、知性であり、すなわち理

性である。このことにより、デカルトは二元論における一つの実体としての精神が存在することを主張する。もちろん、この段階では精神が実体 (substantia)⁽²⁾であるかどうかは断言していない。ただ、考えるもの (res cogitans) としての精神ということであれば、実在性 (realitas) は「もの」(res) に由来する言葉である⁽³⁾ので、「私」とは「もの」として実体 (substantia)⁽⁴⁾であると考えられるのである。

さて、「蜜蠟の分析」⁽⁵⁾の議論が出てくるのは、この後である。

「すべてのうちで最も判明に理解しているとふつつ思われているもの、すなわちわれわれが触れたり見たりしている物体を考察しよう。しかし物体一般ではない。物体の一般的概念は、多少ともかなり混乱しているのが常だからである。むしろ個別的に一つの物体を考察し、例としてこの蜜蠟を取り上げよう。それはたっただいま、蜜蜂の巣から取り出されたばかりである。それ自身の蜜の味のすべてをまだ失ってはおらず、そこから集められた花の香りを多少とも留めている。その色、形、大きさは明白である。固く、冷たく、容易に触れられ、指でたたけば音がする。要するに、そこに備わっているものはすべて、ある物体がきわめて明証的に認識されるために必要と思われるばかりのものである」⁽⁶⁾

ここで、デカルトは物体についての考察を始めるが、物体一般ではない、としている。物体一般の概念については、「第五省察」、「第六省察」で検討されることである。個別的な物体の例として蜜蠟について考察するのである。いま、目の前にある蜜蠟は個体としての蜜蠟であり、蜜の味がして、花の香りがして、固くて冷たくて触ることができ、たたけば音がすると言うものである。すなわち、視覚、味覚、嗅覚、触覚、聴覚の感覚器官を通して認識されるものなのである。このような蜜蠟は物体として認識されるのは、当然のことである。

次に、デカルトはこの蜜蠟を火に近づけて、その変化について次のように述べている。

「私がこう話している間、それを火に近づけると、残っていた味は抜け、香りは消え、色は変わり、形はくずれ、大きさは増し、液体になり、熱くなってほとん

ど触れられなくなり、もう打っても音を発しなくなる。それでもなお同じ蜜蠟が残っているのだろうか？残っていると認めなければならない」⁽⁷⁾

火に近づけた蜜蠟は、このように大きく変化してしまう。しかし、変化しても同じ蜜蠟が残っていると。では、同じ蜜蠟とはなんでであろうか。感覚的に、すなわち、味覚、嗅覚、視覚、触覚、聴覚において変化したとしても同じ蜜蠟であると言うのは、何が同じなのであるか。デカルトは次のように言う。

「すなわち、蜜蠟そのものは、あの蜜の甘さでも、花の香りでも、あの白さでも、形でも、音でもなく、少し前にはあのような仕方で、だが今は別の仕方で私にまざまざと現れている物体であった。しかし私がこのように想像しているものは、厳密には何であろうか？注意してみよう。そして蜜蠟には属さないものをそこから取り除けば、何が残るかを見てみよう。すなわち残るのは、延長をもち、柔軟で、変化しやすいあるものだけである」⁽⁸⁾

形や見た目が変わっても同じ蜜蠟であるというのは、何が同じであるのかと言えば、「延長をもち、柔軟で、変化しやすいあるものだけ」ということである。要するに、物体の本質は「延長」ということであるが、ここではまだ決定的な規定にはなっておらず、暫定的な規定でしかない。なぜなら、「蜜蠟の分析」は物体一般を考察したものではないからである。「蜜蠟の分析」の議論は、物体の本質規定よりも、むしろ物体の本質の認識に関することが主要である。それは次のことである。

「私が、蜜蠟が何であるかを正当に判断しようとするれば、蜜蠟には、延長という観点から、かつて私が想像によって抱いていたよりも多くの多様性があると認める、と考えるのでなければならない。結局、残るところは、私はこの蜜蠟が何であるかを、けっして想像するのではなく、ただ精神によってのみ認識すると認めることである。私は個別的に、この蜜蠟のことを言っているのである。蜜蠟一般においては、もっとはっきりしているだろうからである。だが、精神のみによってしか認識されないこの蜜蠟とは何であろうか。それは、私が見、触れ、想像する蜜蠟と同じもの、結局、最初に思っていた蜜蠟と同じものである。しかし注目

すべきことは、蜜蠟の認識は、視覚や触覚や想像によるのではなく、たとえ以前にはそう見えても、そうであったのではなく、むしろただ精神の洞察（*inspectio mentis*）のみによることである」⁽⁹⁾

このように、蜜蠟が何であるのか、すなわち蜜蠟の本質を認識するのは、感覚や想像ではなく、精神の洞察（*inspectio mentis*）によってなされるのである。この精神の洞察によって、判断しているというのは、何も蜜蠟だけではない。デカルトは次のような例も挙げている。

「もし私が、たまたま窓から道を通行している人たちを以前に眺めたことがなかったとすればである。蜜蠟の場合と同じ慣わしによって、私は人間そのものを見ていると言っている。しかし私は帽子と衣服のほかは何を見ているのか、その下には自動機械が隠されているかも知れないではないか。しかし、私はそれが人間であると判断しているのである。このように私は、目で見ていると思っているものを、私の精神のうちにある判断の能力によってのみ理解しているのである」⁽¹⁰⁾

つまり、蜜蠟を形や見た目が変わっても蜜蠟と判断したように、通りを歩いている人を人間と判断するのは精神の洞察なのである。確かに、感覚のみで認識するのであれば、人間であるかどうかは厳密には判断できない。見えているのは帽子と衣服だけだからである。しかし、その道を歩いている人をわれわれは人間と判断する。その判断は感覚や想像ではなく、精神の洞察なのである。

そして、デカルトは「蜜蠟の分析」から次のような帰結に至る。「私がまさに蜜蠟を見ることから、蜜蠟が存在すると判断するなら、私が蜜蠟を見ることから、私自身もまた存在することが、たしかに、はるかに明証的に帰結するからである」⁽¹¹⁾、また「同じ理由で、私が蜜蠟に触れることから蜜蠟が存在すると判断するなら、さらに同じこと、つまり私が存在することが帰結する」⁽¹²⁾、そして「私が想像することからでも、あるいは他のいかなる原因からでも、まったく同じである」⁽¹³⁾とする。以上のことから、デカルトの帰結は次のようになる。

「結局、私は私の欲していたところにおのずから帰還したのである。というのも、物体そのものは本来、感覚や想像の能力によってではなく、ひとり知性によって認識されること、そして触れたり見たりすることによってではなく、ただ知性で理解することによってのみ認識されることが、いまや私に知られているので、私は、私の精神ほど容易にまた明証的に、私によって認識されるものは何もないことを明らかに知るからである」⁽¹⁴⁾

デカルトの帰結は、「第二省察」の標題にあるように、「精神は身体よりもよりよく知られること」ということに帰着するのである。ここで標題には身体とあるが、もちろん物体のことであり、「蜜蠟の分析」から言えば、蜜蠟という物体を問題にしていると言えるだろう。「第二省察」における「蜜蠟の分析」では、まだ物体一般という概念までには至ってはいないが、物体の本質を認識する上で精神の洞察のみによって判断されることが確認されたのである⁽¹⁵⁾。

2 「第五省察」における物質的事物の本質

「第五省察」について見てみよう。「第五省察」は神の存在論的証明で有名な箇所であるが、その議論の前に行われているのが、物質的事物の本質についての議論である。シノプシスにもあるが、「第五省察においては、一般的に解された物体的本性が説明される」⁽¹⁶⁾のである。ただ、「第五省察」で、いきなり物質的事物の本性が説明される訳ではなく、その兆しは「第一省察」に見ることができる。

「物体的本性一般およびその延長であり、さらには延長されたものの形、さらには量すなわちそれらの大きさと数、さらにはそれが存在する場所、およびそれが持続する時間、などである。それゆえ、これらのことから、われわれはこう結論してもおそらく間違っていないだろう。自然学、天文学、医学、その他の複合されたものの考察に依存する学問は、確かに疑わしい。だが、算術、幾何学その他きわめて単純で一般的なものだけを扱い、しかもそれが自然においてあるかどうかには少しも関与しない学問は、何か確実に疑いえないものを含んでいる、と」⁽¹⁷⁾

ただ、ここで言われているのは「第五省察」において、再び言及されることであるが、これらのことは懐疑の対象となり、一時的に保留されるのである。

「私は、私が見ているものはすべて偽であると想定しよう。あてにならない記憶が表象するものはどれも、何も存在しなかったと信じることにしよう。私はいかなる感覚もまったくもたないとしよう。物体、形、延長、運動、場所は幻想だとしよう」⁽¹⁸⁾

また、「第三省察」のはじめにおいても、物的な事物について、次のような態度をとる。

「いま私は目を閉じ、耳をふさぎ、すべての感覚を退けよう。物的な事物の像のすべても私の意識から消すか、あるいはそれはほとんどできないことなので、それらを空虚で偽なるものとして無とみなそう」⁽¹⁹⁾

感覚から得られる認識を断ち、意識から消そうというデカルトの試みが見られる。しかし、意識に現れてくることは、消すことはできないので無とみなそうとするのである。なぜ、デカルトは、物的な事物についてそのような態度を取ろうとしたのであろうか。それは、「第三省察」は神の存在証明の議論の箇所であり、いまや観念の起源を巡って、神の存在証明をするところなのである。デカルトの戦略としては、神の存在証明をして、さらに神の誠実が保証されなければ、物的な事物の存在は何も言えないからである。神の誠実が保証されない限り、懐疑の中にとどまり、目の前の物的な事物は意識に現れても本当に存在するかどうかは言えないことになるのである。そのような状況でもあるのだが、デカルトは「第三省察」で「第二省察」で行った「蜜蠟の分析」を敷衍して、物的な事物の観念について次のように言及する。

「しかし、物的な事物の観念に関しては、私自身に由来しえたとは思われないほど大きなものは何もそのうちにはない。というのも、私がより詳細に精査し、昨日、蜜蠟の観念を吟味したのと同じ仕方での観念を吟味するならば、それらの

観念において私が明晰判明に認識するものはきわめてわずかしかないことに気づくだろうからである。すなわち大きさ、つまり長さや幅と深さにおける延長、その延長の限定から生じる形、さまざまな形をもつものが互いに占有する場所、運動つまりその場所の変化、それに実体、持続、数を加えることができよう。しかし、その他のもの、たとえば光と色、音、香り、味、熱と冷、その他の触覚的性質は、きわめて不分明に不明瞭にしか私に意識されない」⁽²⁰⁾

ここでは、一見、物体的事物の本質規定に言及しているようであるが、まだ懷疑の中にとどまり、神の存在証明もされていない段階なのである。したがって、物体的事物の規定をしているとは言えない。ただ、注目すべきことは、「長さや幅と深さにおける延長」という第一性質と「たとえば光と色、音、香り、味、熱と冷、その他の触覚的性質」といった第二性質を区別している⁽²¹⁾ということである。これらの区別をしていることから、デカルトは物体の本質規定を潜在的にはなしていることが理解できる。

では、「第五省察」において、デカルトはどのように物体的事物の本質を規定していくのであろうか。デカルトは「第五省察」の冒頭、次のように言う。

「いま、何よりもさし迫っていると思われるのは、(真理に達するためには何を避け、何をなすべきかに気づいた後で) この数日、私が陥っている懷疑から抜け出すよう努めること、そして物質的事物に関して何か確実なものを得ることができかどうかをしてみることである」⁽²²⁾

ここで、物質的事物の本質が考察されていくのである。そこで、デカルトは物体について「判明に想像される」ものは以下のものであると言う。

「すなわち、私が判明に想像するのは、一般に哲学者たちが連続量と呼んでいる量である。あるいは、この量の、というよりもむしろ量をもつものの、長さ・広さ・深さにおける延長である。この量において私はさまざまな部分を数える。それらの部分に、私は任意の大きさ、形、位置、場所的運動を帰し、またそれらの運動に任意の持続を帰する」⁽²³⁾

この箇所ではデカルトは、長さ・広さ・深さといった延長を物的事の本性と捉えていることが理解できる。そして、連続量として捉えている以上、それは数学の対象となるものなのである。したがって、デカルトは物的本性を数量化によって捉えられるものとしたのである。その結果、物体とは長さ・広さ・深さにおける延長であると言えるのである。数量化によって捉えられない感覚的性質、すなわち第二性質は物的性質とは認めても物的本質であるとは言えないのであり、デカルトにおいては不要な性質として捨てられていくのである。

「第五省察」において、物的事の本質が明らかになったとしても、その存在が外的世界あるいは私の意識の外に存在するかどうかはわからないのである。ただし、私の意識の中には、観念として無数に見出されるのである。外的世界に物的物が存在するかどうかは、「第六省察」で扱われることである。

3 「第六省察」における物質的事物の存在

「第五省察」で明らかになった物的事の本質から「第六省察」は物的事物の存在について議論されている。「第六省察」の表題にもあるように、問題としているのは「物質的事物の存在について」である。つまり、物質的事物の存在証明についてである。「第六省察」は次のように始まる。

「残るところは、物質的事物が存在するかどうかを吟味することである。そしてたしかに私は、少なくともそれらが純粋数学の対象であるかぎり、存在しうことをすでに知っている。私はそれらを明晰判明に認識しているからである。なぜなら、私がそのように認識することができるすべてのものを、神がつくりだすことができることは疑いないからである。そして神に何かなしえないことがあるとすれば、それを私が判明に認識するならば矛盾をきたす場合のみである、と私は判断したからである」⁽²⁴⁾

さらに、デカルトは物質的事物を認識するにあたり、想像力を使うことを述べている。

「さらに、そうした物質的事物にかかわる際に、私は想像する能力を使っていることを経験しており、そのことから物質的事物が存在することが帰結すると思われる」⁽²⁵⁾

ここで、疑問に思われることとして、「第二省察」において、蜜蠟の本質を認識するのは、感覚や想像ではなく、精神の洞察 (*inspectio mentis*) にのみよってなされるとあったのが、ここに来て、物質的事物を認識するにあたり想像力を使って認識しているということである。これは、一見、矛盾しているように思われる。しかし、「第二省察」では、「想像するとは、物的なものに形あるいは像を眺めることにほかならないからである」⁽²⁶⁾とも述べている。つまり、物的的事物の本質を認識する場合は、精神の洞察もしくは純粹知性でとらえるのであるが、物的的事物の形や像を捉えるには想像力を使っているのである。デカルトは想像と精神の働き方の違いを次のように述べている。

「したがってこの意識様態[想像]が純粹知性と異なるのは、ただ次の点だけである。すなわち、精神は理解するときには自らをある意味で自分自身に向けていて、精神そのものに内在する観念のうちのあるものを考察している。他方、想像するときには精神は自らを物体に向けていて、精神によって理解された観念、あるいは感覚によって知覚された観念に対応するあるものを、その物体において直観している」⁽²⁷⁾

この段階でも物体が確実に存在しているとは言えない。なぜなら、まだ懷疑から抜け出していないからである。さらに言えば、神の誠実性が何も語られていないからである。そのため、神の保証がないからである。ただ、デカルトは次のように言う。

「ここから私は、蓋然的に物体は存在すると推測する。しかし、それはただ蓋然的のみである。すべてを綿密に探索しても、私の想像において見出される物的本性の判明な観念からは、何らかの物体が存在することを必然的に結論するいかなる論証も得ることができない、と思われるのである」⁽²⁸⁾

このあとに神が欺瞞者でないことが言えて、ようやく物体的事物は存在すると言えるのである。デカルトはどのように議論しているのであろうか。次が物体的事物の存在のクライマックスの部分である。

「しかしいまや、たしかに私のうちにはある受動的な感覚する能力、すなわち感覺的事物の観念を受け取り、認識する能力があるが、しかしそれらの観念を産出ないし、作り出すある能動的な能力が、私のうちであれ他のものうちであれ存在するのでなければ、私は決してそれらを用いることができないであろう。だが、この能動的な能力はたしかに私自身のうちにはありえない。(中略)それゆえ残るところは、この能力は私とは異なるある実体のうちにある、ということである。(中略)しかるに神は欺瞞者ではないので、神が自らによって直接にその観念を私に送り込むのでもなく、そこにおいて、その表現的实在性が形相的にではなく優越的にのみ含まれているような、ある被造物を介して送り込むのでもないことはまったく明らかである。なぜなら、神はそうしたことを認識するいかなる能力をもまったく私に与えず、むしろ反対に、それらの観念が物体的事物から送られてくると信じる大きな傾向性を与えたので、もし物体的事物以外のものから送られているとするなら、どうして神が欺瞞者ではないと理解されうのか分からないからである。したがって物体的事物は存在する」⁽²⁹⁾

このように、物体的事物の存在が証明される。ここには、「神は欺瞞者ではない」と言う神の誠実性という条件が入るのである。それにしても、物体的事物の存在証明は、あまりにもあっさりしすぎている。もちろん、この証明が正しいかどうかを検討する必要があるだろう。しかし、神の誠実性が言えることによって、物体の存在とともに外界の世界も復活してくるのである。そして、懐疑から抜け出すことも可能になってくる。これらのことを考えると、物体的事物の存在証明は、「第一省察」から始まる懐疑から抜け出し、懐疑に決着をつけると言う意味では、大きな役割がある。物体的事物の存在証明により、「第二省察」でのコギトの発見すなわち精神実体の存在とともに心身二元論という実体二元論を確立することができるのである。

4 物質的事物と物体的事物

これまで見てきたようにデカルトは、物質的事物 (res materialis) と物体的事物 (res corporalis, res corporea) を同じように扱ってきているように見える。しかし、ここで物体的事物と物質的事物の違いを確認しておきたい。現代のわれわれが通常使う意味では、物質と物体では意味が異なるし、明らかに区別をしている。つまり、物質とはある物体の素材や材料や材質を示す場合が多い。一方、物体とは形を持っており、何らかの大きさがあり、空間的に場所を取っているものを物体と言う。たとえば、いま、ここに二つの同じ形のコップがあるとしよう。一つはガラスのコップであり、もう一つはプラスチックのコップである。二つとも、物体としては同じ形のコップであり、その空間をコップの形として広がりを持っているが、物質はそれぞれ異なる。一方はガラスであり、もう一方はプラスチックなのである。つまり、物質は異なるものなのである。このように、現代のわれわれとは、物質と物体の概念は明らかに異なっている。

現代的な感覚では、デカルトの言う延長すなわち空間的な広がりを持つと言う意味では、物体という語の方が適切である。物質というと、延長するものと言うよりも、その物質の素材や材質を言うからである。もちろん、物質と物体は異なるものではないし、対立しているものではない。むしろ、何らかの物体は何らかの物質でできていると言えるからである。デカルトの捉え方では、どちらも延長を持ち、何らかの空間的広がりを持つものである。したがって、精神とはその属性は異なっているのであり、物質・物体の属性としては延長を持つものということになる。そうになると、現代のわれわれのように物質と物体を厳密に分ける必要は無くなってくる。結局、物質的事物の本性も物体的事物の本性も延長であり、純粋数学の対象と考えれば、どのような違いがあるのかという問題は瑣末な問題と言える。

また、デカルトの物質観・物体観の背後には、空虚 (真空) の否定⁽³⁰⁾がある。この点は、現代のわれわれとは異なっている。われわれの現在の科学では、空虚 (真空) を否定はしない。むしろ積極的に認める方向である。さらには、ここから空間論においても、デカルトとは異なるのは当然のこととなる。なぜなら、デカルトは空間の中に空虚 (真空) を認めないので、空間と物質は同一化されるのである。そうになると

質と物質の間には、なにも隙間はなく、渦動説が主張されることになる。デカルトの物質観・物体観には、まだ検討するべき問題が残されている。

おわりに

以上のように、デカルトは「第五省察」において、物的事物の本質を純粋数学の対象として捉える。「第六省察」において、物的事物の存在を証明することになる。しかし、その証明においては、「神は欺瞞者ではない」という条件が関わってくる。この条件、すなわち神の誠実性の保証がないかぎり、懐疑から抜け出すことはできずに、物的事物の存在も言えないことになる。懐疑から抜け出せないままだと、いつまでも目の前にある物体は、蓋然的に存在するとしか言えなくなる。物的事物の存在、すなわち外的世界の存在について、いかに神の誠実性が重要であるのかが理解できるだろう。

また、デカルトの物質観・物体観を考察する上では、『哲学原理』や『世界論』でのデカルトの主張を見ていくことが重要である。本稿においては、『省察』における物体の存在についての言及であったために、他のテキストについては取り上げることはなかった。しかし、デカルトの物質観・物体観を理解する上では、空虚（真空）の否定や空間論から渦動説、運動論などを含めた自然哲学を検討していくことが必要である。しかも、デカルトの自然哲学において、これらの考えは全て整合的にいくのであろうか。今後の課題としていきたい。

註

(1) デカルトからの引用は*Œuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, J.Vrin, 1996.* からとし、これをAT.と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。『哲学原理』のみは、その部と節のみを記した。訳文については、『省察』、『哲学原理』はちくま学芸文庫による。AT.VII.27. デカルト(2006) pp.47-48.

(2) 実体(substantia)という語が出てくるのは、「第三省察」(AT.VII.40.)である。

(3) この点については、山田が指摘している。山田(1994) p.224.

- (4) この点については、山田が指摘している。山田(1994) pp.110-111.
- (5) 「蜜蠟の分析」の議論について、持田(1984)が「「蜜蠟の分析」の諸解釈について」という論文で、まとめている。それによると、Beysade が指摘しているように、「蜜蠟の分析」と言っても、テキスト上「広義の分析」（第10段落から第二省察最後まで。AT.VII.29.19～34.9.）と「狭義の分析」（第11段落第2センテンスから第12段落まで。AT.VII.30.8.～31.28.）に区別することができるということである。「広義の分析」においては、その結論は「第二省察」の標題にあるように「精神は身体よりも、より良く識られるということ」である。解釈が大きく分かれるのは、「狭義の分析」についてである。持田も、この論文で「狭義の分析」に焦点を当てており、「同一性」説、「第一性質」説、「延長」説、「認識論」説、「実体」説、「*extensum quid*」説の五つないし六つの解釈を紹介している。そして、Beysade の「実体」説と Williams, Wilson の「*extensum quid*」説との対立に焦点を当てている。本稿においては、この問題における「狭義の分析」の解釈については、言及しないことにする。
- (6) AT.VII.30. デカルト(2006) pp.51-52.
- (7) *ibid.* デカルト(2006) p.52.
- (8) AT.VII.30-31. デカルト(2006) pp.52-53.
- (9) AT.VII.31. デカルト(2006) pp.53-54.
- (10) AT.VII.32. デカルト(2006) pp.54-55.
- (11) AT.VII.33. デカルト(2006) pp.56
- (12) *ibid.* 同上
- (13) *ibid.* 同上
- (14) AT.VII.33-34. デカルト(2006) pp.57.
- (15) 小林(1995)は「蜜蠟の分析」について、「この「蜜蠟の分析」の主眼はあくまで、物質的事物の本質の認識を試みるにしても、それは感覚や想像力に依るのではなく、それとは独立の知的精神によってなされるということ、すなわち精神は感覚や想像力と独立に機能し存在するということを確認することにある。ここで、デカルトが強調するのは、そもそも物質的事物の本質の知覚は知的判断であり、それは知的精神なくしてありえないということである」（p.156）と、述べている。
- (16) AT.VII.15. デカルト(2006) p.30.
- (17) AT.VII.20. デカルト(2006) p.38.

- (18) AT.VII.24. デカルト(2006) p.44.
- (19) AT.VII.34. デカルト(2006) p.58.
- (20) AT.VII.43. デカルト(2006) p.70.
- (21) 第一性質と第二性質の区別は、デカルトには見られない。山田 (1994) によると、「第一性質／第二性質の区別という思想は遠くデモクリトスに見出されるが、第一性質という言葉そのものはスコラにおいて熱・冷・乾・湿という四基本性質を区別する際に使われたことに由来する。次いでボイルにおいて、それは物体の感覚的性質とは区別された幾何学的・機械的性質を意味するようになり、ロックがそれを一般化したという」p.368。スコラにおける第一性質は、ここで言われる第一性質とは異なる。現在、言われる第一性質 (primary qualities)、第二性質 (secondary qualities) は、ロックの『人間知性論』第2巻第8章において、説明されている。
- (22) AT.VII.63. デカルト(2006) p.98.
- (23) *ibid.* デカルト(2006) pp.98-99.
- (24) AT.VII.71. デカルト(2006) p.109.
- (25) *ibid.* 同上.
- (26) AT.VII.28. デカルト(2006) p.49.
- (27) AT.VII.73. デカルト(2006) p.111.
- (28) *ibid.* デカルト(2006) p.112.
- (29) AT.VII.79-80. デカルト(2006) p.119-120.
- (30) 「空虚の否定」については、近藤 (1959) 『デカルトの自然像』 pp.154-158.で扱われている。「デカルトの物質の規定には上述のように矛盾と動揺がつきまとうが、その物質即延長という大胆な主張は、いうまでもなく真空を拒否する主張と密接に結びついている」としている。

参考文献

- Alquié, F. (1950) *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, P.U.F.
- Beysade, J.-M. (1976) “L’analyse de morceau de cire. Contribution à l’étude des “degrés du sens” dans la Seconde Méditation de Descartes”, in *Sinnlichkeit und Vernunft*, 1976, Bouvier Verlag Herbert Grundmann, pp.9-25. ジャン-マリ・ベサード (1996) (持田辰郎訳) 「8 蜜蠟の分析 ——デカルト「第二省察」における「感覚の諸段階」研究への寄与」所

- 収デカルト研究会編『現代デカルト論集 I フランス編』 勁草書房.
- Descartes, R. (1904 (1996)) *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch.Adam et P.Tannery. Tome IV, VII. Vrin. ルネ・デカルト (2006) (山田弘明訳) 『省察』 ちくま学芸文庫.
- Gouhier, H. (1962) *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin.
- Gueroult, M. (1953) *Descartes selon l'ordre des raisons*, Aubier. 2vols.
- 香川知晶 (1982) 「精神の洞見と「実体」」所収『理想』 1982年6月号.
- 小林道夫 (1995) 『デカルト哲学の体系』 勁草書房.
- 近藤洋逸 (1959) 『デカルトの自然像』 岩波書店,
- Locke, J. *An Essay concerning Human Understanding*, edited by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, 1975.
- ジョン・ロック (1972) (大槻春彦訳) 『人間知性論 (一)』 岩波文庫.
- ジョン・ロック (1974) (大槻春彦訳) 『人間知性論 (二)』 岩波文庫.
- ジョン・ロック (1976) (大槻春彦訳) 『人間知性論 (三)』 岩波文庫.
- ジョン・ロック (1977) (大槻春彦訳) 『人間知性論 (四)』 岩波文庫.
- 持田辰郎 (1984) 「「蜜蠟の分析」の諸解釈について」所収『名古屋学院大学論集<<人文・自然科学篇>>』第20巻 第2号.
- Rodis-Lewis, G. (1971) *L'Œuvres de Descartes*, Vrin. 2vols. ジュヌヴィエーヴ・ロディス
-レヴィス (1990) (小林道夫・川添信介訳) 『デカルトの著作と体系』 紀伊國屋
書店.
- Williams, B. (1978) *Descartes: The Project of Pure Enquiry*, Penguin Books.
- Wilson, M. D. (1978) *Descartes*, Routledge.
- 山田弘明 (1994) 『デカルト『省察』の研究』 創文社.